

NEWSLETTER No.2

2010年12月発行

目次

103回比較民俗研究会特別企画の報告	(1・2)
101回比較民俗研究会の報告	(2・3)
102回比較民俗研究会の報告	(3)
『比較民俗研究 24号』の発行	(4)

□第103回比較民俗研究会報告■

特別企画 竹田 旦先生を囲んで

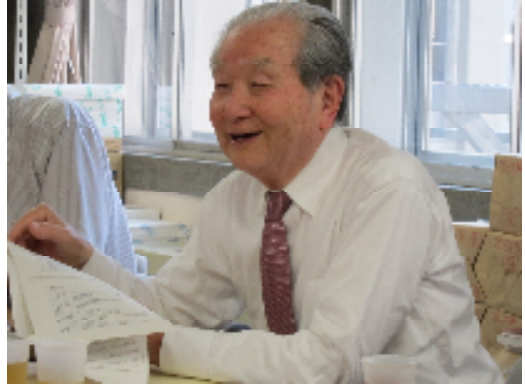
テーマ：「祖霊祭祀と死霊結婚—日韓比較民俗学の試み—」



6月12日、日本民俗学界の重鎮竹田旦氏を迎えて、第103回比較民俗研究会が開かれた。まず、当日司会を務めた小熊誠教授から「社会伝承の分野で日本の民俗学をリードしてこられた竹田先生は、戦後に海外での調査をはじめた先駆的な民俗学者でもあり、早くから比較民俗学の重要性を説かれてきた」との紹介がなされた。

「まず、私の簡単な学問的な自己紹介をさせていただきます」という言葉ではじめられた話は、自身が民俗学を志す契機となった柳田国男との出会いや、韓国と日本の民俗を比較研究する必要性を痛感するに至った経緯に及んだ。

氏は復帰前の沖縄久米島に赴く機会に恵まれたが、そこでの民俗調査が日本や東アジアの婚姻制度を相対化するきっかけを与えてくれたという。戦後、日本本土では戦死した既婚の兄に代わり、その弟が兄嫁と結婚するレヴィレート婚が多くおこなわれたが、それは氏がインタビューした沖縄の女性にとって、まるで理解できないことだった。彼女いわく、そのような結婚は「汚く、口にするのもおぞましい」ことなのだという。竹田氏は沖縄と日本本土でレヴィレート婚に対する考え方が異なるという事実を理解するためには、台湾や韓国を含めた東アジア地域との比較が必要不可欠であることに思い至ったという。



その後、長年韓国民俗学会会長を務めた任東権氏や崔仁鶴氏と竹田氏の交流をとおして 1971 年、日本と韓国で民俗調査をおこなう共同研究会が設立された。これを契機に氏は韓国語を習得し、日本と韓国の民俗について、本格的な比較研究をするようになったのだという。

民俗学の歴史を語る竹田氏の軽快な話に、会場は終始笑いに包まれた。

□ 第 101 回比較民俗研究会報告 ■

高城 玲氏「タイにおける相互行為と社会秩序 - 人類学的研究の視点から -」

第 101 回比較民俗研究会が 1 月 12 日に行われ、高城玲氏（神奈川大学経営学部準教授）による「タイにおける相互行為と社会秩序 - 人類学的研究の視点から -」の発表があった。

タイは、クーデターによって政権交代が繰り返されてきた歴史を持ち、国王、政治家、軍によるそれぞれの牽制・協調の下に「権力のトライアングル」を構築し、緊張関係を維持してきたといわれている。今回のクーデターでもいまだに国内各地の緊張状態は続いている。本報告はこのようなタイの社会を人類学的に解明する試みであり、行為を行為そのものとして捉えるのではなく、あくまで社会や社会秩序との関連の中で捉えるという視点である。

発表の目的は、タイトルとなった「相互関係と社会秩序」という問題を、タイの農村社会における人類学的研究がどのように扱ってきたか、その研究の歴史を紐解き、そこに残されている問題の所在を明らかにすることであるという。この発表は「行為における慣習性」に着目して、「ルースな関係とパトロンクライアント関係」・「儀礼、実践宗教」、「ルークス・チャオバーン、恐れ、ムラの中の国家」「インフォーマルな地方有力者」「日常生活における相互関係」「おわりに - 残された課題」の項目で行われた

□第 102 回比較民俗研究会報告 ■

上映会 & 前田憲二監督トーク
「月下の侵略者 - 文禄・慶長の役と「耳塚」 - 」

3月1日(月)午後2時より前田憲二監督を招いて、異色のドキュメンタリー「月下の侵略者 - 文禄・慶長の役と「耳塚」 - 」の上映会と監督トークが開催された。この作品は永年にわたり、日本と朝鮮半島の文化的、歴史的繋がりを映像(「神々の履歴書」「土俗の乱声」「恨・芸能曼陀羅」「百万人の身世打鈴」)によって追求してきた前田監督が、3年の歳月をかけ完成した作品である。

耳塚とは、文禄・慶長の役で豊臣秀吉の軍の武将が戦果を示すために、朝鮮の人々の鼻や耳をそぎ持ち帰ったものを葬った塚である。京都市東山区にある耳塚には韓国の高校生たちが修学旅行で訪れる。映画は秀吉の朝鮮出兵を巡って、京都の耳塚から始まり、日本(大阪、伏見、愛知県春日井、名古屋九州・広島、岡山、四国など)、韓国(ソウル・珍島・釜山など)、北朝鮮(平壤、普門寺)、中国(紫禁城)の朝鮮出兵ゆかりの地にロケしたものである。監督はこの映画について、「400年前の風を撮ろうと思った。風の匂いとかを通して映像を撮ろうとした」という。

監督トークでは、監督の長年のテーマである「朝鮮・日本とは?」について、「韓国併合 100 年を問う!」というタイトルでお話があった。内容は、①大韓帝国を鞭で併合した日本、②従軍慰安婦問題、③ニッポンとは?であった。③ニッポンとは、の問いに対しては、朝鮮半島と日本の長年の交流を例にとり、「日本は渡来文化の吹き溜まりの文化圏」であり、その流れの中に耳塚はあると語った。

上映時間: 2 時間 48 分 プロデューサー: イ・ウイク、中智、前田憲二
企画・制作: NPO 法人ハヌルハウス 映像ハヌルビデオプロジェクト

『比較民俗研究 24号』の発行

『比較民俗研究』24号が発行されました。簡単に目次のみ紹介します。

- ❖ **巻頭言** 多文化国家日本と比較民俗学・・・・・・・・・・佐々木高明
- ❖ **論文**
 - 端午節の儀礼にみる水上生活者たちの所属意識・・・・・・・・藤川美代子
 - 宮古諸島西原の生徒願い・・・・・・・・・・平井芽阿理
 - ベトナムの首都ハノイの経済活動における
 - 商民俗とコミュニティ形成・・・・・・・・・・長坂康代
 - 「家中過会」：生活の流れにおける民衆信仰・・・・・・・・岳永逸
 - 現代韓国の円仏教の人々の祈りと暮らし・・・・・・・・曹起虎
 - 韓国におけるミロク信仰変容の連続性・・・・・・・・金泰順
 - 波照間島の農耕文化・・・・・・・・・・古谷野洋子
- ❖ **特集：電脳(インターネット)民俗学の可能性**
 - インターネット上で使われる言葉・・・・・・・・岡田翔平
 - メディアにおける話の伝達の可能性・・・・・・・・嶋野安耶
- ❖ **研究・フィールドノート**
 - 韓国の蓮華化生図について・・・・・・・・・・片茂永
 - 現代モンゴル民俗における火の機能及び文化象徴・・・・・・・・娜仁格日勒
 - 故事と歴史の間・・・・・・・・・・任雙霞
- ❖ **“龍の眼”—資料と通信—**
 - 第16回国際人類学民族学連合会世界大会参加記・・・・・・・・高倉健一
- ❖ **比較民俗研究会の記録(2009年第95回～2009年第100回)**

お知らせ

- ◆ 7月27日(火)に第104回比較民俗研究会(施愛東氏「ポスト鐘敬文時代の中国民俗学」、9月14日(火)に第105回比較民俗研究会(坂本要氏「仏教民俗原論」、11月22日(月)に106回比較民俗研究会(阮雲星氏「当代中国における「文化生態保護の理念と実践—貴州『生態博物館を手がかりとして』—」)が開催されました。
次号のニューズレターにてご報告いたします。
- ◆ 『比較民俗研究 25号』の原稿を募集しております。投稿希望者は当会までご連絡ください。

比較民俗研究会ニューズレター 第2号

編集・発行 比較民俗研究会幹事会(神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科佐野研究室) 連絡先: hikakuminzoku@hotmail.co.jp
* 編集担当者 古谷野洋子・藤川美代子・白莉莉